

山頭火ふるさと館報

第5号
令和2年10月

山頭火没後八十年

山頭火の旅 放哉と井月の墓参り

山頭火ふるさと館
館長 西田 稔

今年山頭火が亡くなって八十年になります。山頭火ふるさと館では、没後八十年に因んで山頭火の旅にスポットを当てた「没後八十年記念企画展」を開催し、旅先で記した葉書やそこで詠んだ句を展示して旅中の思いや旅先での交友関係を紹介しています。

また十月には「旅する山頭火 終焉の地」と題してシンポジウムを開催し、漂泊の旅に生きた山頭火にとつて旅する意味や故郷を離れ最期となった四国松山の地のこと、そして憧れた先人たちの思いについてディスカッションします。

実はこのシンポジウムには、スウェーデン元駐日大使で同国俳句協会会長でもあるラーシュ・ヴァリエ氏にもご参加いただき、講演も行う予定でしたが、世界中に蔓延している新型コロナウイルスのためラーシュ・ヴァリエ氏の来日がかなわなくなりました。大変残念でございます。

さて、山頭火は大正十四年、四十四歳の時に曹洞宗禅僧となり、翌年から修行僧として一笠一鉢の行乞の旅に出ます。漂泊の俳人として全国各地を旅しますが、その旅の中で、墓参りを目的にした旅がありました。それは、山頭火が句作に影響を受けた優れた二人の俳人の墓参りでした。

その俳人の名は尾崎放哉（おぎさきほうさい）と井上井月（いのうえせいげつ）。山頭火はこの二人に直接会ったことはありませんが、強く心を惹かれました。

尾崎放哉は山頭火と年代も近く、山頭火と並んで自由律俳句の巨匠とされています。放哉もまた孤高の人でありました。故郷を離れ小豆島で大正十五年に四十一歳で亡くなっています。

一方、井上井月は幕末から明治時代にかけての俳人であり、近代俳句の魁となった人です。井月も晩年は伊那地域で放浪生活をし、明治二十年に六十六歳でその一生を終えています。孤高の旅を続けた山頭火にとつて、二人とも自分と境遇がよく似ていることもあつて親しみを感じ、心を誘われたのでしょう。

放哉の墓参りを二度、井月の墓参りも二度行つており、それぞれの墓前で句を吟じています。放哉の二度目の墓参りでは、「ふたたびここに、雑草供へて」と詠いました。

井月の墓参りでは、最初、長野県までで行つたものの、途中で病気になるって信州飯田で入院するはめとなり、目的を果たせぬまま一度帰っています。墓参りができたのは五年後の昭和十四年の旅の時でした。その時に井月の墓前で詠んだ句を二句紹介します。

「お墓撫でさすりつゝはるばるまゐりました」
「お墓したしくお酒をそぐぐ」

その一年後、山頭火は亡くなります。享年五十九歳でした。

そして昭和、平成、令和と時を重ね、今は全国から多くの方が種田山頭火に逢うために防府の地に足を運んでおられます。

現在、種田家の墓所は熊本市安国禅寺ですが、ここ防府市には護国寺の境内に山頭火の墓と母親フサの墓が並んで建っており、命日には大好きだったお酒を墓にそぐぎ、山頭火を偲びます。



▲俳人種田山頭火之墓
(防府市・護国寺)



▲種田家之墓
(熊本市・安国禅寺)

お悔やみ申し上げます

山頭火ふるさと館設立に大変なお力添えをいただき、山頭火ふるさと会の会長を長年務めてこられた窪田耕二様が、八月十九日にご逝去されました。奇しくも山頭火没後八十年となる年にお亡くなりになられた窪田氏のこれまでのご尽力に対し、心から敬意と感謝の意を表すとともに、平安な眠りにつかれますことをお祈り申し上げます。

企画展

響き合うことば
山頭火句の広がり

会期：令和二年三月二十七日(金)

九月十三日(日)

※新型コロナウイルス感染症拡大防止のための臨時休館に伴い、会期を変更いたしました。

短いことばで表現する俳句を詠む中で、山頭火はさまざまな工夫を凝らしています。

この企画展では、ひとつの言葉で多様なイメージを喚起するような手法が使われた山頭火句を紹介しました。同時に、見る方向を反転させることによってある文字が別の文字にも見える、というさとし氏による「アンビグラム」を展示しました。

「ことばを掛ける」

日本の短詩型文学で最も古くから存在する和歌の表現技法のうち、「掛詞」は、現代でもダジャレとして身近に存在しますが、山頭火の自由律俳句にも受け継がれています。

「自然に託すことば」

和歌で「掛詞」を使うとき、一方では自然を、もう一方で心情を詠むことで、心情表現に奥深さが出ます。しかし、和歌よりも音数が少ない自由律俳句では、直接表現するのは自然の描写だけに留め、そこに心情を象徴的に表現するという手法が使われています。山頭火の句にも多く見受けられる手法です。

「連想による広がり」

何かを見たり、聞いたり、読んだりしたときに、それと関連のあるもの、あるいは関連があると

錯覚するものを思い浮かべることがあります。一見関係ないもの同士が思いがけない関連性によって結び付けられ、短いながら広がりを持った山頭火の句を紹介しました。

【展示資料】

『層雲』第二十三巻第四号(昭和八年八月)、『短冊』あたかなれば木かけ人かけ(種田山頭火、昭和十年)、『短冊額装』ほろ／＼酔うて木の葉ふる(種田山頭火、昭和四年)、『アンビグラム』「ほろほろ」「しあわせます」「いとうさとし」、『第六句集 孤寒』復刻版(昭和五十八年)、『層雲』第二十五巻第二号(昭和十年六月)、『層雲』第二十一巻第十二号(昭和七年三月)、『アンビグラム』「さく／＼ちる」「いとうさとし」、『掛軸』分け入つても分け入つても青い山(種田山頭火、大正十五年)、『短冊軸装』てふてふひら／＼いらかをた(種田山頭火、昭和十一年) 護国寺蔵、『短冊』濁れる水の流れつゝ澄む(種田山頭火、昭和十五年) 複製品、『層雲』第二十五巻第八号(昭和十年十二月号)、『第四句集 雑草風景』(種田山頭火、昭和十一年)、『層雲』第五巻第四号(復刻版、平成九年)、『短冊軸装』草のそよげばなんとなく人を待つ(種田山頭火、昭和十年)、『短冊』ほうたるこい／＼ふるさとにきた(種田山頭火、昭和七年)、『アンビグラム』「ほうたる、ふるさと」「いとうさとし」



目次

館長挨拶	1
企画展「響き合うことば 山頭火句の広がり」	2
おうちミュージアム	2
防府市小中学生自由律俳句投句大会	3
寄稿「自由律句に魅せられて」	3
植田莫展	3
第二回山頭火ふるさと館フォトコンテスト	4
常設展示「山頭火一代句集『草木塔』の普及」	4
今月の一句アーカイブ	4
図書・資料受け入れ報告	5
収蔵資料紹介	5
山頭火没後八十年記念シンポジウム	6
今後の企画展情報	8

おうちミュージアム

期間：五月十一日(月)～九月十三日(日)

四月八日から五月二十五日まで、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、当館も臨時休館を余儀なくされました。また、子どもから大人まで多くの方が外出を自粛されていたことでしょうか。その間、北海道博物館が、自宅でも楽しみながら学べるコンテンツを提供している全国のさまざまなミュージアム同士で手を組み、より広く届けていくことを目的として「おうちミュージアム」を企画され、当館も参加させていただきました。

当館では、「アンビグラム」を解説してみよう」と題し、ホームページ上でアンビグラムのクイズを出題。同時に企画展の展示解説もアップし、山頭火の句とアンビグラムとを自宅でも楽しんでいただきました。



防府市小中学生 自由律俳句投句大会

主催者…防府市新聞販売店主会
募集期間…

令和二年一月十日(金)～二月十日(月)
審査員…島田茶々(俳人)
西田稔(山頭火ふるさと館長)

防府市新聞販売店主会との共催事業として開催。防府市内の小中学生を対象に、自由律俳句を募集しました。小学生からは九六九点、中学生からは六六七点の応募があり、十名が受賞されました。

受賞作品(学年は昨年度のもの)

【小学生の部】
優秀賞

どんどやきどこまであがるかぼくのかきぞめ

佐藤恵太 西浦小学校二年

鏡のうつしだした真実

中村咲陽子 松崎小学校五年

秋の風赤や黄色の葉を乗せていく

木下結菜 松崎小学校六年

佳作

白波ほどけた真珠のよう

左官現 松崎小学校六年

雨ふれ雨やめきれいな虹がでる

永田莉音 佐波小学校五年

【中学生の部】
優秀賞

けんかして涙と重なる痛い雨

森重飛羽 国府中学校二年

イチヨウの葉七枚残る冬模様

石橋怜 国府中学校二年

緊張で凍った空気に響く咳ばらい
濱田妃七 華陽中学校三年

佳作
口から雲

一言のメッセージ時には山のような重さ
原愛実 右田中学校
信國秀太 桑山中学校二年

自由律句に魅せられて

島田 茶々

三十年ばかり前、息子の大学受験の為、天神様に百日お参りに行きました。合格することを一心に願ひ、あの長い石段を上ったものです。その頃山頭火大会の応募があり、自由律がどんなものかも判らず投句しました。

この上に神のいるまつすぐな石段

初めて作った句で、自分の心のつぶやきを句にしました。その句が黎々火の選者特選句となり、これが自由律句に熱中する所以となりました。鳩山先生の図書館での自由律講座、「群妙」等にも参加しています。自由律句は誰にでも判る言葉で、読んでわかる、聞いてわかる、心でわかる、頭で作るのではなくて、感動のひらめきを大切にすれば、誰にだって出来るのが自由律であると思います。

植田莫展

会期…令和二年七月三日(金)

～令和二年八月一日(土)

山頭火句からイメージした絵を描いた植田莫(うへたばく)氏の作品展を市民ギャラリーにて開催しました。

植田莫氏プロフィール

一九四六年生まれ。画家。札幌在住。莫工房主宰。

東京・大阪でグラフィックデザイナーとして活動するも、良寛の心と山頭火の感性にあこがれて画家に転身。油絵・墨絵を制作する中で、染料との出会いにより、その面白さと布の温かさに魅せられて、天竺木綿を刷毛染め、筆書きした独自の絵画で個展活動をしている。

句抄絵とは、俳句からイメージして描いた絵のこと。氏は種田山頭火が残した多くの俳句の中から一句を選び、その時に浮かんだ心の風景を絵にしている。明日に向かって歩くしかなかった彼の後ろ姿に、何かを感じて頂ければ、とのこと。(植田莫氏ホームページを参考)

展示資料

【版画】「菜の花」へ句

逢うて菜の花わかれて菜

の花さかり

【版画】「花の雲」

【版画】「桜へ句」さく

らが咲いて旅人である

【色紙】「あるだけの酒

のんで寝る月夜」

【版画】「道」

【版画】「雲へ歩く」



第二回山頭火ふるさと館 フォトコンテスト

募集期間：令和二年二月一日～七月一日
審査員：鰐石洋己・入江孝治・櫻井宏明・西田稔（敬称略）
フォト展：令和二年八月二日～九月二十六日

昨年度に続き山頭火の句をテーマにしたフォトコンテストを開催しました。今年度は新たにメール部門を設け、プリント部門と2部門募集しました。県内外からプリント部門八十八点、メール部門十八点の応募があり、その中から十八点の作品が受賞しました。新型コロナウィルス感染拡大防止のため、表彰式の開催は断念しましたが、フォト展を開催し、ご来館の皆様にお楽しみいただきました。受賞結果は次のとおりです。

プリント部門

【最優秀賞】 該当者なし

【優秀賞】

内山 えいじ（山口県）

「水はみな音たつる山のふかさかな」

広田 和夫（山口県）

「水に影ある旅人である」

【佳作】

石川 満彦（山口県）

「ひとりひっそり竹の子竹になる」

大井 幸枝（山口県）

「また見ることもない山が遠ざかる」

山本 九二一（山口県）

「炎天のレールまつすぐ」

【入選】

大脇 雅志（岡山県）

「四ツ手網さむく」と引きあげてある」

橘 千加（山口県）

「ひっそり暮らせばみそやゆふ」

廣中 作次（山口県）

「雪、雪、雪の一人」

向井田 稔雄（山口県）

「露草が露をふくんでさやけくも」

山本 幸子（山口県）

「ならんで竹の子竹になりつつ」

メール部門

【最優秀賞】

三戸 律子（山口県）

「ふくろろはふくろろうで

わたしはわたしでねむれない」

【優秀賞】

小林 孝二（山口県）

「ころおちつけば水の音」

酒井 和平（石川県）

「ぶらさがつてゐる烏瓜は二つ」

【佳作】

藤原 義広（島根県）

「分け入つても分け入つても青い山」

松本 康志（島根県）

「水はみな音たつる山のふかさかな」

【入選】

岡川 清吾（山口県）

「朝風の島を二つおく」

亀井 正則（山口県）

「石ころに夕陽しむのみ鳥も来ず」

近藤 博明（広島県）

「秋晴れの島をばらまいておだやかな」

▼受賞作品展示風景



常設展示

「山頭火一代句集 『草木塔』の普及」

展示期間：令和元年四月十二日（金）
～令和二年九月十三日（日）

山頭火の句集には、生前の昭和十五年に出版された自選の一代句集『草木塔』があります。山頭火自身や周囲の俳人が選りすぐったために秀句が多く、現在でも山頭火の句集として広まっています。

山頭火の没後、『草木塔』は、晩年の句友であった大山澄太によって第六版まで版を重ねて出版されていきました。昭和四十六年以降、山頭火ブームが到来すると、一万句以上残っている山頭火の句や日記などを収録した句集や全集が、さまざまな出版社によって編まれていきます。それらの句集や全集において、『草木塔』は必ずと言ってよいほど冒頭に収録されており、山頭火句集として重要視されていることが分かります。

ここでは昭和十五年から平成十二年までに出版された『草木塔』七冊を展示し、生前に編んだ『草木塔』がその後どのように普及し、多くの人に読まれていったのかをご覧いただきました。

【展示資料】

種田山頭火『草木塔』（八雲書林・昭和十五年）、大山澄太編『草木塔』（山頭火遺稿刊行会・昭和二十七年）、大山澄太編『草木塔』（財団法人山頭火顕彰会・昭和三十一年、昭和三十六年）、小島米雄発行『草木塔』（潮文社・昭和四十七年）、大山澄太・高藤武馬編『草木塔』山頭火の本（春陽堂書店・昭和五十四年）、『愛蔵版句集シリーズ』山頭火―草木塔（日本図書センター・平成十二年）

今月の一句 アーカイブ

山頭火ふるさと館では毎月山頭火の句を一句選んで皆様にご紹介しています。これまでに紹介した「今月の一句」を振り返ります。

令和二年

三月 水底青めば春ちかし

昭和八年三月

春先は特有の肌寒さ、風の冷たさがあります。それでも冬に比べれば日照時間は長くなり、日差しも強さを増していきます。句の「青めば」は草木などが青く茂ることを意味しています。日毎に長く強くなってきた日差しによつて水底に生える藻などが青く茂ってくる様子から、春が近くなつてきたことを感じ取っている句です。

四月 わいてあふれる湯のあつさ汗も涙も

昭和十年四月

山頭火は、其中庵に住んでいた頃、湯田温泉にある千人風呂という大衆浴場によく行っていました。この頃の山頭火は体力の衰えや俳句作りについて悩みを抱えており、憂うつな気分を解消しようと気分転換もかねて温泉に入りに行っていたようです。大浴場で汗をかき、心の内にある様々なものも洗い流されてゆくように思えたのかも知れません。

五月 きんぼうげ、むかしの友とあるく

昭和七年五月

旅の途中、山口県美東町大田（現美祢市）に伊東敬治を訪ねました。伊東は小郡出身で大正十年頃から葉書のやり取りをしていた古い友人です。しばらく過ごした後、途中まで送ってもらいながらともに山中を歩いた時のことを詠んでいると考えられます。明るいきんぼうげの花を見ながら昔からの友人と歩く道中を詠んだ、懐かしさや親しみのこもった一句です。

六月 緑平老に

ひさしぶり逢へたあんたのほひで

(彼氏はドクトルなり)

昭和七年六月

緑平老すなわち木村緑平は、山頭火より六歳年下の『層雲』同人で、この頃は炭鉱医をしていました。「あんたのほひ」とは緑平と会うたびに感じられた医者らしい匂いのことではないかと考えられます。受け取った手紙等から感じられた匂いに緑平を思い出し「ひさしぶりに逢へた」と詠んだのではないのでしょうか。緑平に対する深い友情がうかがえる句です。

七月 ゆふべはうれて

枇杷の実のおちるしめやかさも

昭和八年七月

夕暮れどき、熟した枇杷の実が落ち、静かひっそりとしていると詠んでいます。句の「おちる」は「枇杷の実」のことと、「ゆふべ」つまり夕方であることから「陽が落ちる」ということの両方にかかっていると受け取れます。また、「ゆふべ」と「枇杷の実」から淡いオレンジ色が連想され、句全体に一日が終わる前の静かな時間と優しい色合いが広がっていくようです。

八月 一草庵裡山頭火の盆は

トマトを掌(て)に、

みほとけのまへに、ちちははのまへに

昭和十五年八月

山頭火最晩年の頃の句。それまで「ちちはは」と詠んだ句はありませんでした。一草庵で心身ともに落ち着いた暮らしをする中で、俳句や自分自身について深く考えることができていたようです。その中で両親を純粋に両親として捉え、お盆にお迎えをして供養する気持ちから出てきたのが、「ちちはは」という言葉なのではないでしょうか。

図書・資料受け入れ報告

これまで寄贈いただいた資料の一部をご紹介します。

■二〇一七年度

寄贈

杉山久子氏より『山頭火百句』（坪内稔典・東英幸）、山頭火ふるさと会様より『額』ここにおちつき草もゆる（秋山巖）、橋本隆道氏より『層雲』第七十五巻第十二号（伊藤完吾）他七十五点

御著編書

末岡翠香氏【書画】分け入つても分け入つても青い山、戸田勝氏【書画】三日月よ逢ひたい人がある、富永鳩山氏【自由律俳句クラブ群妙】二十二号、都谷森孝子氏【山頭火句碑拓本紀行】、成井恵子氏【蕪村・山頭火・三鬼の魅力】

■二〇一八年度

寄贈

田中健次氏より『尾崎放哉隨筆・書簡』（尾崎放哉）他三十四点、松原吾子氏より『織物』「遠くのはなしこえも月夜のいねの葉」（久保白船）、松山順三氏より『笠も漏りだしたか』（北野木鶏）他二点、三浦明氏より『種山山頭火 漂泊の俳人』（金子兜太）他十二点

御著編書

富永鳩山氏『自由律俳句クラブ群妙』二十四号他二点、中原中也記念館様『中原中也研究』第二十三号、夏石番矢氏『世界俳句二〇一八第十四号』他二点、防府市文化協会様『防府の生んだ自由律俳人山頭火』平生伸子氏【押し花】「山頭火」

■二〇一九年度

寄贈

上田恵子氏より【短冊】「らんぶが家の中につき彼が心中にある煩惱」（近木圭之介）、田中健次氏より『種山山頭火』漂泊の俳人（金子兜太）他二十六点

御著編書

小玉水石氏『人生模様詩集 2』第十七集他二点、佐川智英美氏『ベクトルのはじまり 自由律三人句集』、『青穂』事務室様『青穂』第三十三号他二点、富永鳩山氏『自由律俳句クラブ群妙』創刊号他三十二点、吉田正孝氏『山頭火の放浪・山頭火への旅』

誌面の都合上すべてを掲載できませんが、この他多くの図書・資料を寄贈いただきました。ありがとうございました。

収蔵資料紹介

種田山頭火葉書 (池原漁眠洞宛て) 五点

凡例

- 一、旧字体は新字体に改めた。
- 二、改行は原文どおりとした。
- 三、適宜、濁点および句読点を補った。

① 昭和九年四月十日 消印 (名古屋赤塚)

表 県内 津島町

池ノ堂

池原漁眠様

名古屋にて

四月十日 種田山頭火

裏

たいへんお世話になりました、奥様によろしく、皆様によろしく、一昨夜は尊蓮亭、昨夜はこゝリンゴ舎、これから木曾路へ、どうぞ諸兄へよろしく
 昨夜は山頭火さんに泊つていただきいろいろ歓談いたしました。この因縁大へんうれしく思つてゐます 有

② 昭和九年四月十四日 消印 (長野吾妻)

表

愛知県海部郡

津島町池ノ堂

池原漁眠様

木曾川のほとりにて

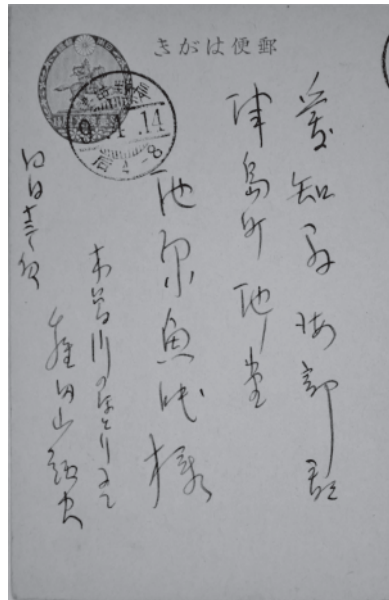
種田山頭火

四月十三日夜

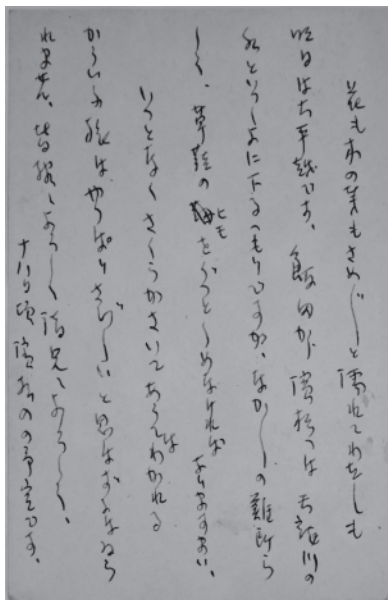
裏

花も木の芽もさめたくと濡れてわたしも昨日は大平越です、飯田から浜松へは天龍の水といつしよに下るつもりですが、なか／＼の難所らしく、草鞋のヒモをぐつとしめなければなりません、いつとなくさくらがさいてあうてはわかれるかういふ旅はやつぱりさびしいと思はずにはあられません、皆様によろしく、諸兄によろしく、十八日頃浜松入の予定です

② 昭和九年四月十四日 表



② 昭和九年四月十四日 裏



③ 昭和九年四月二十八日 消印 (飯田)

表

愛知県津島町

池ノ堂

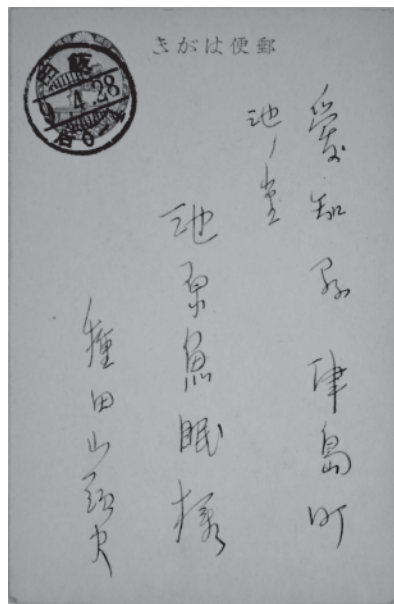
池原漁眠様

種田山頭火

裏

御心配をかけたましたが、やうやう汽車に乗れるやうになりました、いづれ帰庵しましてからまた、
 浜松宛に御手紙いただきました
 四月廿八日

③ 昭和九年四月二十八日 表



③ 昭和九年四月二十八日 裏

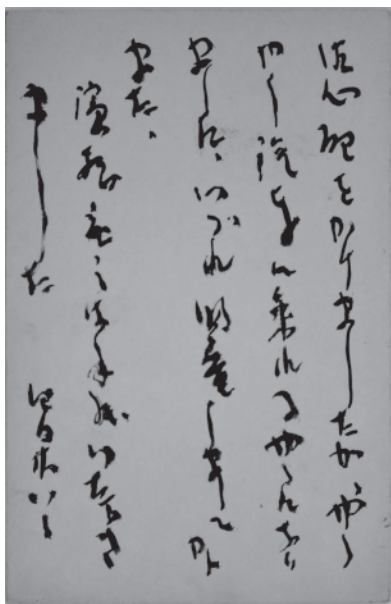


表 ④昭和九年五月一日 消印 (山口小郡)
 愛知県津島町
 池ノ堂
 池原魚眠様
 山口県小郡町
 種田山頭火
 四月三十日

裏 出発の節お手紙いたゞきました、加藤さんによく
 昨夜帰庵いたしました、これで落ちつけ
 ます、庵中独臥、気永に日永に養生いたしませう、余の方々に一々おたよりをさしあげられません、どうぞよろしくお伝え下さいまし、お手紙読みかへして、ありがたさをあらたにいたしました、奥様御母堂様によく、写真はよく出来てゐますね

表 ⑤昭和九年五月十三日 消印 (山口小郡)

愛知県津島町
 池ノ堂
 池原魚眠様
 山口県小郡町
 種田山頭火
 五月十二日

裏 「ふぢなみ」いたゞきました、あつく御礼申上げます、どうやら穀雨もはれさうです、松蟬がしきりになきます、さみしくなると私は鶯笛をふきます、ずゑぶんへタクソ鶯です、今日から明日へかけてはきつと飲客の来庵を直営してゐます、いづれまた

【解説】

昭和九年三月二十二日、山頭火は小郡の其中庵から長野への旅に出かける。憧れた俳人・井上井月の墓参を目指して名古屋から木曾川沿いを歩くが、飯田で肺炎を患い、結局井月の墓参は断念して汽車で其中庵に戻っている。

今回は、その旅の道中でお世話になった、愛知県津島に住む『層雲』同人の池原魚眠宛てに出した葉書五通を翻刻した。

①は漁眠洞宅を後にし、名古屋から出したお礼の葉書。名古屋では大橋蓮子の尊蓮亭および森有一のリンゴ舎に泊まったようだ。葉書はリンゴ舎から出している。一人とも『層雲』の同人で、山頭火の文章の後に「昨夜は山頭火さんに」と書いているのが森有一である。

②は木曾川沿いを歩き、大平峠を超えて飯田に入った頃に出した葉書。旅中で詠んだ句が書かれていたり、今後の旅程を知らせたりと、旅先からの葉書らしい文言が並ぶ。また、「かういふ旅はやつぱりさびしいと思はずにはゐられません」といった率直な思いも伝えている。

③は二通目から二週間ほど後の葉書。この間に肺炎にかかつて入院していたが、この葉書では汽車で其中庵に帰ることを知らせている。ひとまず用件のみ、といった様子は筆遣いからも伝わる。「浜松宛に御手紙いたゞきました」とあるが、②で浜松に入る予定を知らせていたため、漁眠洞は山頭火への手紙を浜松の郵便局留めで送っていたのだろう。

④は、其中庵に戻ってきたことを知らせている葉書。漁眠洞から山頭火宛ての葉書は残っておらず、山頭火が「ありがたさをあらたに」した内容については不明である。

⑤は、漁眠洞から贈られた「ふぢなみ」に対するお礼の葉書。「ふぢなみ」は詳細不明。この頃の日記を読むと、まだ体調は完全に戻ってはいなかったものの、国森樹明をはじめ多くの句友が其中庵を訪れ、食料を持ってきて酒を酌み

していたことが分かる。鶯笛を吹いたり句友と共に過ごしたりという其中庵での養生の様子を伝えている。

山頭火の旅の足跡は日記から辿れることが多いが、昭和九年の長野への旅では、日記を書いていない期間が多い。出発した三月二十二日から二十六日まで詳細に記しているが、それ以降四月十三日まで空白である。十四日以降は次のように書かれている(『山頭火全集 十一巻』春陽堂書店)。

- 四月十四日 坂下から清内路へ。
- 曇、やがて晴、そゞろ寒い、春がおそい今年で、さらに春がおそいこのあたりで。
- 四月十五日 清内路から飯田町へ。
- 四月十五日 蛙堂居
- ” 十六日
- ” 十七日
- ” 十八日
- ” 十九日
- ” 廿日
- 四月廿一日 川島病院
- ” 廿二日
- ” 廿三日
- ” 廿四日
- ” 廿五日
- ” 廿六日
- ” 廿七日
- 四月廿八日

このように四月十四日から四月二十八日までほとんど日記を記していないが、句友への葉書は頻繁に書き送っており、日記の記述を補う資料として重要である。特に池原魚眠洞は旅中でお世話になったこともあり、何度も葉書を出しているが、この旅の最中の日記には登場しない漁眠洞へ宛てた葉書からは、漁眠洞との交友関係も明らかになる。(当館学芸員・高張優子)

山頭火没後八〇年 記念シンポジウム 旅する山頭火 終焉の地

日時 十月二十五日(日) 十三時三十分～
会場 防府天満宮 参集殿

最期までふるさとに戻ることなく漂泊の旅に生きた山頭火。その晩年の旅はどのような旅だったのか、そして終焉の地として選んだ四国松山でどのように暮らしたのか。憧れた先人尾崎放哉への思いにも触れながらディスカッションをおこないます。

またシンポジウム中、登壇者および参加者からの投句を受け付け、全作品を後日館内に掲載します。

パネラー

太田和博(まつやま山頭火倶楽部事務局長)

森克允(「放哉」南郷庵の会幹事)

富永鳩山(書家・山頭火ふるさと会初代会長)

コーディネーター

西田稔(山頭火ふるさと館長)

申込方法

九月十八日(金)から、葉書または電話にて申込を開始します。先着順。定員八十名。

※掲載内容は、新型コロナウイルス感染症等の状況に応じて変更する場合がございます。

※シンポジウム当日の新型コロナウイルス感染症対策については、当館ホームページをご覧ください。

今後の企画展情報

山頭火没後八〇年記念企画展

「旅を記す ～山頭火からの便り～」

期間：開催中(令和三年一月十一日(月・祝)自由律俳人種田山頭火は、全国各地を放浪しながら句を残しました。

没後八〇年を迎えるにあたり、旅先で記した葉書やそこで詠んだ句の短冊、掛け軸などを展示し、旅中の思いや旅先での交友関係を紹介します。旅中ながら山頭火の旅を紐解きます。葉書を通して現れる新たな山頭火像をお楽しみください。



企画展「俳句の中の生き物」

期間：令和三年一月十六日(土)

三月三十一日(水)

俳句には植物や動物、虫など、小さな生き物が多く登場します。山頭火やその仲間が俳句に詠んだ生き物に焦点をあて、句の中でのように生きていくかを探ります。また、そうした身近な生き物を通して表現される心情を読み解きます。ぜひご覧ください。

山頭火ふるさと館のご案内

開館時間

午前十時から午後六時

(ただし、特別企画展の開催中は、展示室への入室は午後五時三十分まで)

休館日

毎週火曜日(祝日の場合は次の平日)

十二月二十六日～十二月三十一日まで

観覧料

無料

※なお、特別企画展を開催する際、観覧料を設ける場合があります。

アクセス

防府駅でんじんぐちから約一・五km

まちの駅「うめてらす」から約一〇〇m

山陽自動車道防府東・西ICより約七分

駐車場

普通車用三台、身障者等用二台(ふるさと館横)

無料観光駐車場二十五台(ふるさと館斜前)

山頭火ふるさと館報

第5号

令和2年10月1日発行

編集・発行

(公財)防府市文化振興財団

山頭火ふるさと館

〒747-0032

山口県防府市宮市町5番13号

電話 0835-28-3107

FAX 0835-28-3113

印刷

大村印刷株式会社

山口県防府市西仁令一丁目21番55号